慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成25年度 入学式

医学部112名が入学

さる4月1日、平成25年度慶應義塾大学入学式が、日吉記念館にて執り行われた。少し寒さを感じるものの、晴天の中、日吉キャンパスには大勢の人が押し寄せ、活気に満ちあふれていた。

式典は午前と午後の2部構成で行われ、医学部は経済学部や看護医療学部、薬学部とともに、午後の部への参加であった。初めに、長谷山彰常任理事による学事報告が行われ、各学部の入学者数が発表された。本年度の入学者数は6840名、うち医学部は112名、看護医療学部104名、薬学部が222名であった。慶應義塾全体の入学者数は前年度よりもわずかに増加したものの、ほぼ変わらない数となった。医療系学部としても昨年度の入学者数と変化はあまりなく、医学部の入学者数については同数となった。

続いて、清家篤塾長により式辞が述べられた。塾長は、「現在の日本は社会構造の変化の真只中にいる。そのような状況で大切になってくることは、自分の頭で物事を考える、ということである。これは系統的に、プロセスを立てて物事を考えていくというようにも言うことが出来る。では、どうすればこの能力を磨けるのかというと、学問をしっかり行うことで磨くことが出来る。学問をしっかり行うためには、幅広い分野の学問を学ぶということや、スポーツといった課外活動にも精力を出す、といったことも大切となってくる。福澤先生も変化の時代を生きたが、先生も学問の重要性を説いていた。特に、実学ということを重要視していた。実学とは、科学のことであり、物事を系統的に考えていくということである。新入生諸君には実学、自分の頭で物事を考えること、を意識して学問に励んで欲しい」と述べた。

式辞に引き続き、壇上の各学部長が一人ずつ紹介された。教職員代表祝辞では、別役智子医学部教授が、「チャンスとチャレンジを意識して学生生活を送ってもらいたい。チャンスとは転がっているわけではなく、自分の力で掴み取るものだ。それには2つの条件があり、豊富な経験と、その経験から意味を見出す能力を持つ、ということである。豊富な経験とは様々なことに対して意欲を持つことであり、努力を積み重ねていくことで得られていくもの。そうして得られた経験から、自分の思い込みにとらわれずに意味を見出していくことが出来れば チャンスを得られるようになるだろう。偶然を必然に変える努力をしながら千載一遇をものにする気概で大学生活を送って貰いたい。また、チャレンジとは、自分の成功体験をじっくり考えながら、向上心とともに物事に向き合っていくという姿勢である。チャレンジする上で、時として孤独を伴うこともあるかもしれないが、実際は孤独なのではなく、常に他者と手を取りあっているのだということを意識して貰いたい」と述べた。

また、塾員代表祝辞として、神野信郎中部ガス株式会社相談役から、「現在は世界規模で変化の時代の中にあるが、新入生諸君は革新的な思想を持ち、世界国家日本を掲げ、その先導者となるべく日々励んでほしい」との言葉が送られた。

新入生代表による入学の辞では、医学部の星勇気君が、「慶應義塾は各方面で活躍されている人材を多数輩出している学舎であり、ここで学ぶことが出来るのは私達新入生にとってとても光栄なことである。将来、世界の先導者たるべく羽ばたくということは私達の使命であり義務である。そのためにはまずは目前のことについて日々努力して行きたい」との抱負を語った。

新入生6840名の、これからの活躍に期待したい。

（文　5年　岡田真彦
写真　5年　森田篤帆）

応援指導部の指揮による塾歌斉唱

第8回 白衣式

決意新たに、臨床実習へ

去る3月23日、平成24年度白衣式が、本塾北里講堂にて執り行われた。白衣式は、約25年前に米国コロンビア大学で行われたのを初めとし、臨床実習に臨む医学生にプロフェッショナリズムを意識させるための行事として、今や世界中の医学部で採用されている。本塾では、2006年に第1回の白衣式が行われ、今年で8回目を迎える。

式典には末松誠医学部長をはじめ、武田純三病院長、笠原忠慶應義塾常任理事、比企能樹三四会長らが列席し、臨床実習を控えた94回生105名に、祝辞が贈られた。また、来賓として迎えた北村聖日本医学教育学会副理事長・東京大学教授より、餞の言葉を賜った。北村氏は、「臨床実習、ひいてはチーム医療に参加する上で皆さんに求められる能力で一番大切なものはなんだろうか。基礎医学の知識、臨床医学の知識、知識に裏打ちされた臨床技能、さらには臨床推論、そして患者さんとうまくコミュニケーションをとること、などももちろん重要なことである。しかし、これらだけではなく、『プロフェッショナリズム』ということも大切であろう。この言葉、敢えて訳すならば『使命感』ということになるのではないだろうか。医師としての使命感、これをもってもらいたいと思う。」と語った。

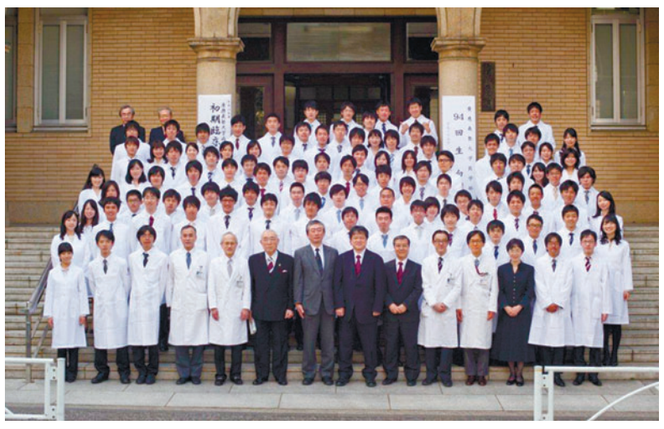
そして、餞の言葉の締めくくりとしてマザー・テレサの言葉を紹介した。

そして、いよいよ白衣の授与である。参加した学生一人一人が、末松医学部長をはじめとした教員に白衣を着せて頂いた。真新しい白衣を着た学生がずらりと並ぶと、会場からは大きな拍手が沸き起こった。今年は例年同様、北里講堂に入りきらなくなるほど父兄の参加が多く、父兄らの関心の高さが伺えた。その後、94回生105名により、誓いの言葉が唱和された。

「目の前の〝いのち〟のために、世界の〝ひとびと〟のために、耳を傾け、手を取り合い、想いを伝え、先を観る。初心を忘れず、飽くなき向上心を胸に社会の先導者となるべく挑戦し続けることを誓います。」

誓いの言葉は、有志により組織された白衣式委員会を中心に、94回生全員が協力し、数カ月をかけて考えられたものである。105名が声をそろえて誓いの言葉を読み上げると、会場からはより一層大きな拍手が沸き起こった。最後に、平形道人医学教育統轄センター長が閉会の辞を述べ、列席の教員ならびに94回生全員で写真撮影を行なって、白衣式はお開きとなった。

この白衣式にて白衣を授与されることで94回生は医療界の門戸を叩き、実際の臨床現場に出て医療および医学をより深く学んでいくことになる。4月から始まる臨床実習では、たとえ悩み迷うことがあっても初心に帰ってこの言葉を反芻し、日々研鑽を積んでいきたい。（4年　岡田真彦）



北里講堂前での集合写真

教員より白衣を授与される94回生

94回生 誓いの言葉

目の前の〝いのち〟のために
世界の〝ひとびと〟のために

耳を傾け、手を取り合い、
想いを伝え、先を観る

初心を忘れず、飽くなき向上心を胸に
社会の先導者となるべく挑戦し続けることを

誓います。

第一回 初期臨床研修（研修医課程）修了式挙行される

平成24年度初期臨床研修（研修医課程）修了式が、平成25年度3月23日、信濃町キャンパス北里講堂において行われた。本修了式は、慶應義塾大学病院の初期臨床研修を修了した54名（医科48名、歯科6名）を対象に、三四会役員・協力型病院指導医の先生方にも参列いただき、今年度、初めて開催された。

修了式では、武田純三病院長による式辞の後、末松誠医学部長、比企能樹三四会長、平形道人卒後臨床研修センター長より祝辞が述べられた。それぞれから、東日本大震災直後の対応、電子カルテ、完全予約制、ER24時間体制を導入する中で、研修医として研鑽を積んだ経験と、2年間一緒に研修した仲間を大切にしてほしいと餞のことばが贈られ、武田病院長より、研修修了者一人ひとりに修了証が授与された。

また、研修医間の互選により推薦され、「ベスト研修医」として表彰された太田裕一朗君から、修了者代表として、「研修」への思いと更なる飛躍への決意、そして、研修に尽力いただいた指導医、職員への謝辞が述べられた。

修了式後の懇親会は、三四会の協力により開催され、吉野肇一三四会評議員会議長の祝辞、角田和之研修医担当主任からの挨拶・乾杯にはじまり、指導医の先生方と和やかな雰囲気の中で歓談が行われた。最後に、研修修了者を代表して、園部秀樹君からの謝辞、藤島清太郎副センター長からの挨拶が述べられ、名残惜しくも閉会となった。

修了式・懇親会は、協力型病院の先生方、三四会の先生方にもご来臨いただき、最新・最良の医療を求め続ける社中として、研修医修了者たちの今後の活躍に、エールが贈られた。

（卒後臨床研修センター　平形道人　62回）

平成24年度准教授講師会総会および懇親会を終えて

准教授講師会会長　末岡　浩（59回）

平成24年度准講会総会が、3月14日（木）第一会議室で開催された。

准講会会員として専任に加え有期教員もメンバーとなり、会員数は139名となった。新入会員（敬称略・順不同）は、副島研造、志水秀行、内田裕之、長沼誠、渡辺賢治、洪繁、田久保圭誉、新井文用、二木康夫、石井賢、榎本宏之、井上詠、國仲慎治、藤原俊之、峰岸一宏、田中京子、板野理、尾原秀明、河野光智、伊東大介、佐々木光、堀口崇、田口眞一、香取信之、矢澤真樹、佐々木淳一の26名である。

議題として、新病院棟建設計画に対する准講会の協力について議論され、余剰金活用計画のなかで、今後努力してゆくことが承認された。

引き続き、懇親会は総合医科学研究棟1階ラウンジにおいて末松医学部長、武田病院長を来賓にお迎えして開催された。

今回は武田病院長からの病院事業への協力についての熱心なご講演をいただき、診療・研究・教育の中核をなす准講会のメンバーへ改めて呼びかけがなされた。病院運営・新病院棟建設に備えて強いメッセージが伝えられたことは間違いない。

末松医学部長音頭の下、乾杯で意気を挙げた後は、新任された医学教育統轄センター長の平形道人先生の「医学教育のパラダイム・シフト～今こそ　求められる質の高い医学教育!!～」についてのレクチャーを拝聴した。教育が慶應医学医療の根幹をなす重要な領域であり、これを支える准講会との関わりについて熱烈なメッセージが示された。かつての教育が教育者側から知識を授けるスタンスであったのに対し、求められている新たな教育は、〝学生のため〟が重要であり、学生が満足の出来る教育が求められていることを熱心に語られた。准教授講師会のメンバーでもある門川俊明先生を始め2名が強く平形先生を支えていることも紹介された。講演後には平形教授と准講会メンバーとの対話が多くもたれ、教育への情熱が熱気を帯びて交歓された。

新入会員から自己紹介があった。今回からは、専門、出身、顔写真も盛り込まれたスライドの使用もあり、当日用事で欠席でもご自身のスライドでの参加もあり、お顔を拝見することができた。相互理解のうえで、大変良い機会となった。

シリーズ講演は、会計幹事でもある医療政策・管理学教室の吉村公雄先生から「疾病登録―臨床研究を支えるインフラストラクチャー」のご講演を頂戴した。昨年1月から電子カルテが導入され注目されているものの良い成果を得るためには疾病登録・追跡調査・臨床研究への応用・情報の保護など、しっかりとした設計が必要であることを疫学的立場から解説された。講演後には臨床の医師との間でメールアドレスの交換も見受けられ、コミュニケーションの場となった。

新たに塾外から赴任されて入会された分野の異なる先生方を知るうえで素晴らしい場であると共に准講会が慶應義塾に貢献するミッションを確認するうえでも意義深い会であった。

ミニレクチャー講師の平形道人先生

シリーズ講演の吉村公雄先生

JST・再生医療実現拠点ネットワークプログラムに採択

iPS細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療

生理学教室教授　岡野　栄之（62回）

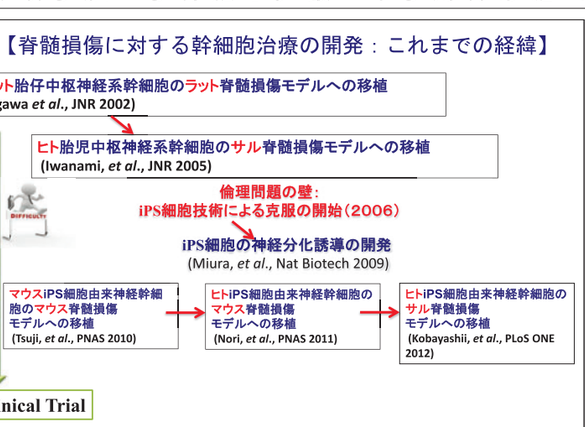
私達の研究グループは、10数年に渡り、慶應義塾大学医学部整形外科学教室との緊密な共同体制のもと、将来的な臨床応用を見据えて、脊髄損傷モデル動物に対する神経幹・前駆細胞を用いた細胞治療の基礎的検討を行って来ました。特に過去10年間に渡り文部科学省・再生医療実現化プロジェクトで　前臨床研究を進め、臨床研究への展望が現実味を帯びて来たところであります（上図）。

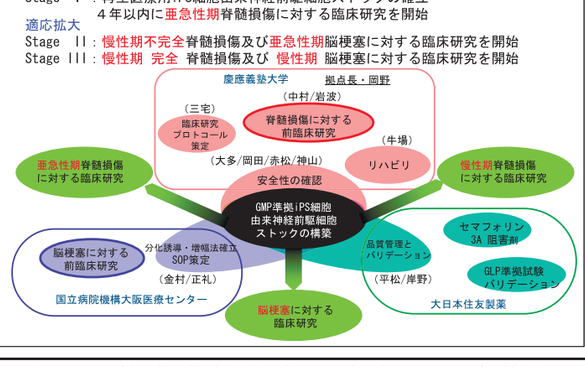
そしてこのたび文部科学省・JSTの再生医療実現拠点ネットワークプログラム・疾患・組織別実用化研究拠点事業に「iPS細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療」という研究課題で応募し、採択して頂く事ができました。このプログラムでは、生理学教室に加え、整形外科学の中村雅也先生、CRC特任教授の三宅真二先生、医工連携とリハビリテーション科学のエキスパートの牛場潤一先生、CPCのエキスパートの国立病院大阪医療センターの金村米博先生と大日本住友製薬株式会社という最高のメンバーを組むことが出来ました。

このプログラムでは、私達がこれ迄の研究を通じて培ってきた幹細胞研究に関する基本技術（分離、培養、in vivo実験）、インフラ（GMP対応CPC、フローサイトメトリーコアファシリティー、動物用MRI、マーモセット飼育・前臨床研究施設等）を最大限に活用し、iPS細胞由来神経前駆細胞を用い、亜急性のみならず慢性期を含めた脊髄損傷更には脳梗塞に対する再生医療を実現化することを目指します（下図）。

この4月から始まる最初の4年間では、臨床グレードの「再生医療用iPS細胞由来神経前駆細胞ストック」の構築を行い、安全性・有効性に関する検証と臨床プロトコールの作成と「ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針」に基づく臨床研究申請準備を進め、4年以内に「再生医療用　iPS細胞由来神経前駆細胞ストック」を構築し、脊髄損傷（亜急性期）に対する臨床研究の開始（First in Human）を達成し、同細胞を用いた慢性期脊髄損傷及び脳梗塞を対象とした前臨床研究を推進する計画であります（第Ⅰ期）。以降第Ⅱ期では慢性期脊髄損傷（不完全麻痺）及び亜急性期脳梗塞、第Ⅲ期では慢性期脊髄損傷（完全麻痺）および慢性期に対する同細胞とリハビリテーションの集学的な併用療法に関する臨床研究の開始（First in Human）を達成し、大日本住友製薬と提携し、将来的な治験実施・承認への道筋をつけたいと考えております。

これらのMiles stoneを達成し、これまで有効な治療法がなかった脊髄損傷や脳梗塞に対する再生医療を我が国発のiPS細胞技術により実現できれば、これらの病に苦しむ多くの患者さんたちに一条の希望の光を投げかけられるものと信じております。





鑑賞知来

私が所属する薬理学教室では、安井正人教授が国際交流委員会委員長を務めておられることもあり、大学院生・ポスドク等の若手メンバーの約半数が外国人です。それに、欧州やアジアの大学から短期滞在で大学院生達が、入れ替わり立ち代わりやってくるので、様々な異なる人種の学生たちと日常的に接しています。そうすると国籍の違いなど意識しなくなります。いつも教室では、いつの間にか親子ほど歳の差が開くようになった学生達とも、国の違い、ついでに年の差も気にもせずに友達感覚で過ごしている私ですが、昨年、日本とアジア近隣諸国との国際関係で今までにない緊張状態が続いた時には、国どうしの関係を意識させられる出来事もありました。

まず、ポスドクに採用予定だった中国の大学院生が、日中関係を憂慮した両親の反対に会い、来日できなくなりそうになりました。それでも彼女が反対を押し切って来日した理由は、子供のころから好きだったMANGA「ドラえもん」の国だから大丈夫と思ったからだそうです。秋に成都でのシンポジウムに招待された時には、近くでも反日デモが起こり、さすがに緊張しました。そんな私にある修士学生が、気を使って色々と話しかけてくれて助かりました。彼女は、「ドラゴンボール」と「ワンピース」の大ファンなのだそうです。親日感情を持つきっかけは、Jポップに寿司など、人により様々ですが、特に若者にはMANGAの影響力は絶大で、世界の若者達の日本に対する好感度を高めているのをしばしば実感します。

今後、国際情勢も不安定になり、国家間の緊張状態が高まる場面もあると予想されます。若い研究者達が国際共同研究を通じて個人レベルでの信頼関係を築き、それが研究成果だけではなく、国家間の相互理解と国際情勢の安定化にも繋がっていくようになれば、本当に素晴らしいと思います。

（薬理学　相馬義郎　66相当）